愛物語

美空翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
愛物語

【Ｎコード】
Ｎ８０３１Ｄ

【作者名】
美空翼

【あらすじ】
１ヶ月前、新一が帰って来た。…誰もが考えていた、毛利蘭との幸せな生活。―――だが、それは一変した。…工藤新一が選んだ人間―――それは…親友の、鈴木園子…だった。好きだったのだ。愛していたのだ。…だが、もう、２人の間に入り込む事は出来ない。隙さえない。―――あなたとじゃなきゃ、幸せになれないのに…どうして、私を選んでくれなかったの…？…気が付けば、クラス公認、学校公認となっていた新一と園子。…私の幸せは、あるのでしょうか―――？

Chapter. 1 Prologue（前書き）

工藤新一×鈴木園子…新園です。
苦手な方はご注意を。

Chapter. 1 Prologue

「好きだよ…」

…1人、そう呟いてみても、何も変わらない。

「好き、なんだよ…愛してるんだよ…」

もう1度、呟いても…言い方を変えても、何も変わらない。

———泣きじゃくった。

顔はもうぐちゃぐちゃで。

それでも涙が溢れてきて。

Why?———何故?どうして…?

…それは、彼が彼女を選んだせい。

Chapter. 1 Prologue（後書き）

Prologue＝プロローグ

Chapter. 2 Mean heart, insanity, hatred

――Where will be my happiness…？

私の幸せは、何処にあるのでしょうか…？

◇◆◇◆◇◆

――元に戻った工藤新一が、真っ先に会いに行ったのは。

…毛利蘭、だった。

温かく見守っていた周囲。

誰もが、2人がくっ付くのだと思っていた。

……密かに、思いを寄せていた鈴木園子も。

彼女には、京極真という彼氏がいた。

だが、それは執着心を愛と摩り替えていたモノ。

彼も…執着心を愛と摩り替えたモノだった。

だが――ダメもとで…告白してみると…

――返ってきたのは、意外な返答。

それも、即答だった。

◇◆◇◆◇◆

———放課後、時間あったら…屋上に来て。

古いようなその誘い。
告白と、分かるような誘いだった。
…だけれども。
彼は、約束通り来てくれて。
いつも通り、接してくれた。

「何の用だよ、園子」
「…あ…あの、ね…」

少し下向きだった視線を真っ直ぐと向け。
口を開き、声を発した。

———好きです…付き合って、くれませんか？

…多分、無理だろうけど。

———いいぜ…

「……え？だ、だって…アンタには蘭がいるでしょ…？」

元々、この告白をダメもとだったんだし……園子は戸惑いがちにそう言う。

…彼には———毛利蘭という思いの人がいたハズだ。

「蘭はただの幼馴染。それ以上でもそれ以下でもない」

「…っ……」

———不覚にも零れた涙。

吹き荒れる冷たい風。
手足も冷えてきた。
…そんな私を、彼はそっと、優しく、抱きしめてくれた。
“愛してる”
そんな言葉を、耳に囁きながら――――…。
◇◆◇◆◇◆
…工藤と鈴木、付き合ってるらしいぜ。
…ねえ、知ってる～？工藤君と鈴木さん、付き合ってるんだって！
…お似合いだよなぁ。いろんな意味で。
…毛利さんよりも、ある意味お似合いだよねぇ～。
――――それは私への嫌がらせ？
…そう思ってしまうほど、その話題を耳にした。

聞きたくない、ヒトコトまで…。

「――――…？蘭…？」

「！？」

ハッとし、すぐに誤る。

ぼーっとしていたみたいだ。

「ねえ、蘭。最近様子おかしいよ？大丈夫？」

「あ…う、うん。大丈夫だよ。疲れてるだけだから」

こんなの嘘。

嘘に…決まってるじゃない。

園子は新一との関係について触れてこない。

…園子ならやりそうな、惚気すら聞いていない。

――――恨めしい。

…工藤と鈴木、付き合ってるらしいぜ。

…ねえ、知ってる～？工藤君と鈴木さん、付き合ってるんだって！

私の方が絶対似合うわよ。
…育ってゆく、キタナイココロ。
それは、ほぼ狂気に近かった。

◇◆◇◆◇◆

（――あ……）

「――！」
「――？――」
「――！！――！！」
「――。――」

会話は聞こえない。
楽しそうな――工藤新一と鈴木園子。
噂によれば、工藤新一は『蘭とは幼馴染。それ以上でもそれ以下でもない』と言い切ったそうだ。
…自分はその中に入れない。

キタナイココロ

キョウキ

ネエ、ドウシテ？
ドウシテ、アナタハ、ワタシジャナクテ、ワタシノシンユウノソノコヲエランダノ？
…ワタシジャア、イケナカッタノ？ダメダッタノ？

…イライラする。
ムカつく。

———ソノコナンカ…シンジャエバイイノニ……

…そうすれば、自分は彼の傍にいられる。
どうしてしまったのだろうか。
鈴木園子は、自分の親友…だった、ハズ。
なのに———どうして、こんな憎悪が浮上してくるのだろうか。

…コロシチャオウカナ。
ソウスレバ、カレハイッショウワタシノモノ。
———ツイデニ、カノジョモ。

もはや…浮かんでくるのは、狂気に近いモノだけだった。

Chapter. 2 Mean heart, insanity, hatred

mean heart, insanity, hatred＝汚い心、狂気、憎悪

Chapter. 3 Foresight dream

「ら…蘭…！？」

「どうしちゃったの！？」…目の前には、拳銃を持ち穏やかな笑みを湛えている蘭の姿。
周りは一面の闇。
光りは、一切なかった。

「――――どうしたって？私が狂ってるとでも言うの？…なぁに言っちゃってんのよ、園子。私はいつだって正気よ？」

「そんなわけないじゃない！」…その言葉は、喉で留まった。

――――蘭の瞳は、青紫だ。

その瞳が…尋常じゃないぐらいに…透明、何も映していなかった。

恐怖を覚えた。
自分のせい？
自分が…工藤新一の恋人だから？

…親友、だったのに…？

「さぁて。園子ちゃんには、此処で死んでもらいましょうか」

アンタは邪魔なの。
新一の隣は…私が1番似合うのよ。
新一も、きっと騙されてるんだわ。
私の方が、綺麗だもの。

――心も体も、ね…。

◇◆◇◆◇◆

（っ！！？）

「嫌ぁっ…！」

冷や汗が背中をつたる。

コワイ、コワイ、コワイ、コワイ、コワイ、コワイ、コワイ

後に残るのは恐怖心。
…精神は…恐慌していた。

予知夢？
それとも…ただの嫌な夢？

コワイ、コワイ、コワイ、コワイ、コワイ、コワイ、コワイ

◇◆◇◆◇◆

クスクスクス…クス…

おかしかった、もの凄く。
ネットで見つけた密売サイト。
麻薬、拳銃、薬品、ナイフ…
様々なモノが密売されていた。

（準備ＯＫ…後は時を、待つばかり――）

◇◆◇◆◇◆

「――あ、新一君」
「よっ、園子。どうする？今日も家に来るか？」
「…うん」

怖かった。
少しでも、荒れた心を沈める為に…。

「…どした？園子…？」
「ううん。何でもなーい！」

それより、警視庁行くんでしょ？さっさと行って、帰ろうよ！…押し隠したその心。
…多分、この目の前の男は、気付いているのだろう。

「あ…ああ」

◇◆◇◆◇◆

「――…」
「――！――――！」

目暮と話す新一を、園子はぼーっと眺めていた。
片手にはお茶。

「あら、園子ちゃんじゃないの。どうしたの？工藤君に着いてきたの？」
「…え？あ、ハイ」
「そっかぁ～。蘭ちゃんの事本庁に連れて来た事はないけど…さっすが、工藤君の彼女ね♪」
「……そ…ですね…」

「――どうか、した？」
「いえ、別に…」
「え？でも――」

あの夢のせいか。
妙に、元気がない。

「――園子！」
「あ、新一君！」

先程までの雰囲気は何処に行ったのか。
いつもの、明るい園子に戻っていた。

「帰ろう！」
「おう」

佐藤に挨拶をし、入口へ向かう。

「あ、工藤君！」
「はい？」

振り返る新一。
立ち止まる園子。
そして…言葉を発する、佐藤。

「――守ってあげなさい。園子ちゃんの事」
「……？」

◇◆◇◆◇◆

――この時は、まだ意味が分からなかった。
…後に、この意味を知る事になるとは思わずに…。

Chapter. 3 Foresight dream（後書き）

Foresight dream＝予知夢

Chapter. 4 Why will I, I have loved h

…毎日…毎日のように、大きく、より汚くなってゆくココロ。

―――以前の自分では、考えられなかったような毎日。

憎い、あの女が。

憎い、私じゃなくてあの女を選んだ新一が。

それは…壊れ、狂気に充ちた、憎さという名の愛…。

ここ1ヶ月、人形のような生活を送ってきた。

当たり前だ。

あの日から…自分は壊れ狂い、おかしくなってしまっている。

◇◆◇◆◇◆

聖人君主…否、聖人君子とまで呼ばれていたあの頃とは違う。

知識、徳望の優れた理想的な、人間とは…。

―――蘭…大丈夫？最近、様子がおかしいって聞いたけど…。

やはり、バレていたか。
母親まで、誤魔化せるとは、思ってもいない。
だが、こんなココロの中身まで知られるわけがない。

――…？蘭…？大丈夫？最近、ぼーっとしてるけど…具合でも悪い？悩みでも、あるの…？

親友――否、憎い女からの言葉。
ええ、そうね。
盛大に悩んでるわよ。
…アンタの所詮でね…。

――蘭？どうしたんだよ？最近、様子がおかしいぞ……？

ご名答、私の愛している…もうすぐ私のものになる名探偵さんね。流石だわ。

…でも、流石に、このキタナイココロの中身までは分からないみたいね。

◇◆◇◆◇◆

「――よぉ、姉ちゃん。暇か？…なら、俺と付き合ってくんねぇ？」

「いいわよ。――その代わり、高いからね、私は」

「アンタみたいな美人になら、いくらでも金は払うさ。…名前は、なんつーんだ？」

「…毛利蘭…」

「もうりらん？漢字は？」

「毛に利用の利、蘭は花の蘭よ」

「毛利蘭、か…いい名前だなぁ…」

じゃ、ちょっくら付き合ってもらうぜ…男に連れられ、毛利蘭は、
その場を去った。

———以前までの聖人君子の自分には、考えられない出来事。

◇◆◇◆◇◆

ニヤリ、と笑ったその顔は
以前までの、笑顔じゃなくて
恐ろしいまでの殺気を背負い

怖い、怖い、怖い、怖い

その思いだけが取り巻き、ついに私達は———

◇◆◇◆◇◆

「はぁはぁはぁ…っ」

…最近見る夢は。
徐々に徐々にと酷くなっていっている気がする。
何故？———それは、私が彼女から彼を取り上げたから。

◇◆◇◆◇◆

どうしてあなたは変わってしまったの？

何故自分は彼女ではなく彼女を選んだのだろうか。

何でよりによって彼の事を好きになってしまったのだろう。

――――どうして、彼女、彼の事を愛してしまったのでしょうか…？

Chapter. 4 Why will I, I have loved h

Why will I, I have loved him, her？＝何故、私、俺は彼、彼女の事を愛してしまったのでしょうか？

Chapter. 5 The truth in darkness

いつも通りの事件現場。
いつも通り解決して帰るはずだった。
…家に帰れば彼女が待っていると、安心した自分がいけなかった。
送ってくれるとの申し出を断り。
歩いて帰路に着く。

———なんなんだろうか、この、嫌な予感は。

◇◆◇◆◇◆

Ｐｒｒｒｒｒ…Ｐｒｒｒｒｒ…

「———はい、もしもし。工藤ですけど…」

携帯の画面に表示されるのは、『非通知』の文字。
番号を変えた知り合いからか、はたまたは間違え電話か。

『———こんにちは、名探偵サン？』

聞き覚えのある声のはず…なのに。
何故だろう？
…別人の声に聞こえる。

「…ら、ん…？」

思わず確認してしまった。
当たり前だ。
…声の質は同じなのに、声色が全く違う。

『あら、バレちゃったの？面白くないわね…』

クスクス、と電話越しで笑う彼女。
…全然、イメージには合わなくて。
でも、何故かいつかこうなる事を予測していたかのように、頭の何処かでは冷静に考えていて。

「…どういう事だ？」
『ふふっ、どういう事もないわ。―――鈴木園子は預かったわ』

「！？」

『返してほしければ…Kビルに来なさい。―――そして…私のモノになったら鈴木園子は返してあげる…』

まあ…自分を選ぶか私を選ぶか…鈴木園子の命を選ぶか、ってところかしら？…彼女とは思えない声色。

…彼女は、『園子』ではなく、『鈴木園子』とフルネームで呼んだ。どういう事だ？彼女達は…親友では、なかったのだろうか…？

『じゃあね…もうすぐ私のモノになる名探偵サン？』

何故、彼女は変わってしまったのだろうか。

ツーツーツー……

後に残るのは。

…虚しく響く、機械音だけだった―――。

◇◆◇◆◇◆

何処でどう間違えてしまったのか。

何処でどう狂ってしまったのか。

彼女は何故、あんなにも変わってしまったのか。

…それは分からない。

まだ、今のうちは…。

――――真実は闇の中にある

Chapter. 5 The truth in darkness（後書き）

The truth in darkness＝真実は闇の中に

Chapter. 6 Will oneslf be the canse

―――ポツン…ポツン…

廃ビルに響く水音。
園子は、ゆっくりと目を開けた。

辺りは薄暗く、気味が悪い。

自分は、一体どうしてこんな場所にいるのだろうか。

「あら、お目覚め？」
「……？」

頭が巧く回らない。
寝起きだからだろうか。
それとも、眠らされた薬のせいか。

クスクス…クスクス…

「―――ら…ん…？」
「薬がまだ効いているのね」

まあいいわ。
あなたはただの餌なんだからね。

…本当に、目の前にいるのは蘭なのだろうか。
態度が違う。
いつもと、雰囲気も気配も空気も…全てが、私の知っている蘭ではない。

恐怖を覚えた。
どうしようもなく。

―――何故、こんな事になっているのだろうか。

◇◆◇◆◇◆

なるべく時間を有効に使おうと、新一は路地裏を抜けた。
そして１つ向こうの通りに出て、右へと走る、走る。

人はいない。
深夜だからだろうか。

（園子……っ…！）

早く、速く、はやく、ハヤク…！

―――何故、どうして…？

その問いに答えてくれる人はいない。

偶々通りかかった人に見られても。
気にしない。

（蘭…っ…なにを考えているんだ…！？）

分からなかった。
蘭が、なにを考えているか。
どうしてこんな事態にまで発展したのか。
何故だ、何故だ、どうして、どうして…？

◇◆◇◆◇◆

階段を一気に駆け上がる。
早く、速く、はやく、ハヤク…！
最後の力を振り絞り、階段を駆け上がった。

◇◆◇◆◇◆

「あら…お早いお着きね…」

王子様が着たわよ？お姫様…と、蘭はクスクス笑いながら言う。

（新一君…っ）

ギュッと目を瞑り…園子は手を握った。
握ると言っても…ロープに結ばれて巧く出来ない。

（……っ）

響き渡る足音。
それも段々と着実に近づいて来た。

―――バン！

扉が開き…肩で息をする、新一の姿が見えた。

「…っ！新一君…っ！」
「園子……っ」

「―――あら…随分とお早いお着きねえ…王子様？」
「蘭…てめぇ…」

何故、こんな事になったのか。
どうして、こうなったのか。

…クスクス…クスクス…

「私じゃなくて園子を選んだ新一が悪いのよ。私の方が綺麗だし、ね」

これでも聖人君子って呼ばれてたんだもの…蘭なんだろうか、本当に。

ジャカ

「！！？」

そんな音とともに、向けられたのは———黒く光る、拳銃…だった。

「園子の命を選ぶ？それとも…自分を選ぶ？———園子の命を選ぶのだったら…私のモノになるのね」

そう言いながらも、拳銃で新一の方を撃つ。

初めてだった、拳銃でモノを狙うのは。

それにしては…上出来だった。

「蘭…！やめて！お願い…！！」
「嫌よ。…自分が悪いんだから、今更そんな事言わないで」

声が出なかった。
自分が悪いのか。
そのせいで…蘭が壊れたのか、狂ったのか…明るい道を踏み間違えたのか。

「さあ…どうする？」

このビルには、爆弾が仕掛けてあるわよ。

◇◆◇◆◇◆

自分が悪いのか。
彼女がああなった理由は自分にあるのか。
壊れ狂い明るき道を踏み間違えたのは…自分が悪いのだろうか。
彼が自分を選んだから？
自分が彼を選んだから？

――――私がこの世に存在するから…？

Chapter. 6 Will oneself be the cause（後

Will oueslf be the cause＝自分のせい

なのだろうか

Chapter.7 Love or a desire for exclu

このビルには、爆弾が仕掛けてあるわよ。
その言葉に、背筋が凍る。
そして、新一は蘭を睨みつけた。

「蘭！お前なぁ…！――――いい加減にしろ！！」

蘭は、ぴくりと眉を吊り上げる。
もはや、それは以前の蘭とはかけ離れていて。

「いい加減にしろですって…？…アンタこそ、いい加減にしなさいよ。どうして、園子を選んだの？私は、『待ってろ』って言われたから待ってたのに。どうして？ねえ、どうしてよ？――――どうして……何で、私を選んでくれなかったの…？」

心が、悲痛なまでの叫びを上げている。
そう言われればそうだ。
何故、自分は彼女に『待ってろ』などと言いながら、彼女を選んだのだろうか？
本来なら、彼女を選ぶべきではないのか？
――――それでも。

自分は、彼女の親友を選んだ。
何故？――――決まっているではないか。
…自分が彼女を愛してしまったから。
もう、幼馴染のことを愛す事は――――出来ない。

「それは――――」

答えようとした新一の言葉を、園子が遮った。

「――――好きになっちゃ…いけないの？好きになる理由が、愛する理由が、要るの？…しょうがないじゃない…好きになったら好きになったで。愛してしまったら愛してしまったで」
「…っでも！新一は、私に待ってるように言ったのよ！？」

園子の意見に、蘭は反発する。
先程までの雰囲気は何処へ行ったのか。
園子は、落ち着きを保っていた。

「…だから？」
「『だから？』って何よ！」
「だから何よ？待ってるように言っただけ。誰も、『好き』とか『愛してる』とは言ってないじゃない。…人には変化があるもんじゃないの。気持ちだって、思いだって。いつまでも、同じわけじゃな

い。蘭、それは、本当に、好き、愛してる、っていう気持ちなの？…ただ、ずっと一緒にいた幼馴染だから、これからも一緒にいて欲しい、とかっていう、気持ちじゃないの…？」

「――――っっ……！」

気が付けば。

ぽろぽろと、大粒の涙を流していた。

新一は、ただ呆然とそのシーンを見つめていた。

◇◆◇◆◇◆

「――――そうかもしれないね」

「蘭…？」

突然、呟かれた言葉に、新一が首を傾げる。

園子は、蘭の方を向く。

「ただの、独占欲かもしれない。『愛』なんかじゃ、ないかもしれない」

「……蘭」

そして、黙って、軽く頭を下げる。

「ゴメンね。…ゴメンなさい」

誤るだけでは、物足りないかもしれない。
だが、今は、ただ、謝っておきたい。

ゴメンなさい、ゴメンなさい、ゴメンなさい。

これは、人生に大きく、深く刻み込まれるであろう過ち。

「もう、いいよ。蘭」
「そうそう。誤られると、逆にこっちがどういう反応を返していいのかわかんなくなるし」

ハハッと、3人で笑い合った。

◇◆◇◆◇◆

自分は大きな過ちを犯した。
だが、後悔はしていない。

こんなこと、するんじゃなかった。
何故、こんなことをしてしまったのだろうか。

後悔は、していないのだ。
大きな間違いに、気付かせてくれたから。
だから、今だけは、出来事を忘れて。
———今は3人で、笑顔を向け合う。

Chapter. 7 Love or a desire for exclusive

Love or a desire for exclusive possession＝愛かそれとも独占欲か

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8031d/

愛物語

2010年10月10日18時28分発行